



# 卵と天花粉

[ブザーが鳴って8]

5月16日

Sudden Fiction Project

高階 經啓  
hirotakashina

## 5月16日のおはなし「卵と天花粉 [ブザーが鳴って8]」

---

ブザーが鳴って、待っていたが誰も入って来ない。おかしい。隣の部屋のブザーだったのだろうか。そういえば少し前、どこか遠くでもドアホンが鳴っていた気がする。おれは半身を起こした状態でしばらくじっとしていた。デスクに突っ伏して眠ってしまっていたのだ。まだ目も開かない半目の状態でもあった。半身の半目でと考えているうちにハンミョウを追いかけて夏の暑い土埃舞う田舎道をてくてく歩いている心持ちがしてきたところで、腹の底から響く「どうううん」という爆発音がして完全に目が覚めた。

咄嗟に自分がやられたのかと思って身体を調べ、部屋の様子をうかがったが、いくつかの小物が下に落ちたことを除けば特に問題はない。おれはそっと立ち上がり、窓から外の様子を見る。窓から見える足元の橋の上の人が何人か立ち止まってこちらを見上げている。スーツを着た二人連れの一人が指さしているのはこの建物の下の階のようだ。おれはブラインドを上げて窓を開けて、下の階を見下ろした。

「人がいるぞ！」

煙が目に入るより先にまずその声が耳に入った。見ると橋の上にはだんだん人だかりができ始めていて、その中から声が上がる。「おうい。大丈夫か?」「そんなところにいちやダメだ」「逃げろ!逃げろ!」誰に言っているのかと思ったらおれに向かって言っているのだった。次の瞬間、二階ほど下の部屋の窓から煙が立ち上るのが見えた。「火事だ!」「爆発だ!」「爆弾だ!」みんながこっちを指さして口々に叫ぶので、自分がアメコミのヒーローにでもなったような気がして来る。そのうち誰かが「いや、スーパーマンだ!」と叫ぶんじゃないだろうか。

「誰もいないと思ったんだがね」

いきなり背後から声がする。おれはぎくっとして振り向いた。そこには小柄でほっそりした男が立っていた。ジャケットもシャツもズボンも全体にグレーの服を着ていて、それを言うと髪も顔色も手にした筒状のものもみんなグレーな印象で、実にとらえどころがない。輪郭がよくわからない。表情も声さえもが輪郭がはっきりしない。声もグレーだと言ってもいい。

「誰です」

「人がいないことを確かめたつもりだったんだ」

「誰なんです」

「ここに人がいてもらっては困るんだ」

男が手にした筒を構えるのと、おれがその場にしゃがみ込むのがほぼ同時だった。筒の先から

何か飛び出し背後で破裂音がした。ギャラリーの奥の方のブラインドと窓がもろとも滅茶苦茶になって窓下の運河に落ちて行った。おれはとっさに手元の骨董品をいくつか投げつけた。バターナイフ、バターナイフ、バターナイフ、スプーン、ドアベル、ドアノブ、蝶番、ひどくまがまがしい顔つきの年寄りをかたどったナットクラッカー、ベビーパウダーの容器。

ベビーパウダーの容器が利いた。正確にはその中に残っていたベビーパウダーが。つまり高度成長期に詰められた天花粉の残骸が。男が容器を手で払うと蓋が開き、ぱっと白い粉が宙に舞った。視界を奪われると同時に、男は猛烈にくしゃみを始めた。天花粉そのものにアレルギーがあるのか、高度成長期以来その容器の中で何かおぞましい化学反応が進んでいたのか、単にダニが発生していたのか、男は立て続けにくしゃみをした。見たことも聞いたこともない慌ただしさでウェクシュビャクシュイックシュハクシヨイバクシヨイと、上体を揺すりながらマンシンガン並みのくしゃみをする様は、ネジを巻けばシンバルを打ち続ける猿の人形そのものだ。

おれは男の隙をついて戸口に向かってダッシュした。下の階が火事だということはすっかり忘れていた。とにかくこの男から逃げ出そうと考えていたのだ。けれどドアを開けるとその向こうには頭から血を流した狂犬のような目つきをした男Bが立ちふさがっていた。顔の右半分はべったりと血でおおわれ、妙に潤んだ右目が異様な光を放ち、閉じかけた左目のあたりからは元左目だったらしいぬらぬらとした卵の白身めいたモノがぶら下がっている。見ただけで失禁しそうだ。

「どけ」

男Bは、失禁しそうなおれを突き飛ばすと、勝手におれのギャラリーへと進み、部屋の中央でくしゃみし続けている男A、つまりグレーの男に歩み寄り、いきなり抱え上げたかと思うと、さきほど吹き飛ばされた窓の開口部に突進してあっと言う間もなく男A Bもろとも身を踊らせた。

「ああっ！」

というどよめきが外から聞こえる。おれが窓辺に駆け寄ると二人の男は五階下の運河脇のコンクリート部分に叩き付けられ横たわっていた。奇妙な角度に身体をねじり、からまりあい、どことなくソーシャルダンスめいた姿勢で。

「まだ人がいるぞ！」

誰かが叫んだ。橋の上の人だかりの方を見るとまたみんながこちらを指さしている。またか。同時に階下から勢い良く上がる煙に気づく。しまった。振り向くと開いたままの戸口からも煙が入ってきている。さあどうする。おれはグレー男Aに吹き飛ばされ、たったいまグレー男Aをかつぎ上げた血まみれ男Bが飛び降りた窓を見つめ、情けない気持になる。ここから飛び降りる？ うまく運河に入って、底が十分深ければ何とかなるかもしれない。最悪骨折くらいで済むか

もしれない。運河まで届かなかったら？ あの二人の仲間に加わってソーシャルダンスを踊ることになる。その途端、また「どうううん」という爆発音があって、部屋に煙がなだれ込んできて、それでもう何も分からなくなった。

\* \* \*

病院に搬送される途中、救急隊員風の男に尋ねてみた。「なんだったんです？」「隣家への訪問者です」「なんですそれ」「ほら、連続テロの」「連続テロ？」「テロ組織〈隣家への訪問者〉です」「ああ」わかったような返事をしたが本当は全然わからなかった。まだその時は。そのうち〈隣家への訪問者〉について世界で一番詳しくなるとも知らずに。おれは半身を起こそうとして半目になってそれからハンミョウのことを考えながら眠りに落ちてしまった。深い深い眠りに。落ちたのが五階からじゃなくて良かった。

(「隣家への訪問者」 ordered by atohchie-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 新作スタート。お題募集中。

---

2011年10月1日。

Sudden Fiction Projectの新作発表が始まりました。

1日1篇ペースをめざしていますが、これはどうなるかわかりません。  
毎日、その日のお題を見て、いきなり書き始めていきなり書き終わる。  
即興的に書くSudden Fictionをこれからお楽しみください。

お題募集中です。

「[急募！お題](#)」のコメント欄で受け付けています。  
どなたでも気軽にご注文ください。初めての人、大歓迎です。

(お題の管理上、TwitterやFacebookでは見逃しがちなので、  
どうか上記コメント欄をご利用ください)

それではこれからしばらく新作のシーズンをお楽しみください。

※発表済みの作品をご覧になりたい方は  
「[SFPインデックス \(ただいま作成中\)](#)」  
をご活用ください。

## 卵と天花粉 [ブザーが鳴って8]

<http://p.booklog.jp/book/36014>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/36014>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/36014>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.